テスト勉強のため
セックスを我慢してた二乃。

「今回のテスト
全教科赤点回避したわ……！
約束通りホテル行くわよ」

「この日のために
ずっとガマンしてきたん
だから……♥」

「今日まで頑張ったんだから
ちゃんと付き合いなさいよ……」
こうして
俺たちはホテルへと
向かった。

「ちょ…
さっきから胸ばかり……
あっ……♥」

普段からは想像が
つかない甘い嬌声が
二乃の口からこぼれる

ビクッ

「ううっ♥♥」

「〜〜!!
しょうがないでしょ……
あんたが私の胸ばっかりもんで
開発したんだから……♥」

ぷくっ

白磁のような肌に
たわわに実った巨乳。
俺は二乃の髪の匂いを
楽しみながら
乳をもみしだいた。

はっ

あっ

ドキ

ドキ

「ちょっと…!
流石にシャワーくらいは
浴びさせなさいよ……♥
あっ……♥」

「あっ……♥♥
そんなに乳首コリコリしたら
イ…イっちゃう……♥」

「ひぐっ♥
んんっ～～～♥♥」

んんッ♥

んっ♥

二乃は快楽を噛みしめながら
達した。

「さっきはよくも
やってくれたわね……♥」

「倍にして
返してあげるわ……♥」

二乃のやわからな膣肉が
俺自身を飲み込んでいく。

「ふふ…
謝まったって
許さないわよ……♥♥」

「どう私のおまんこ……♥
気持ちいい…？」

「訊くまでもない
ないようね
顔に書いてあるわ…♥」

「今日はたっぷり
喘がしてやるわ……♥
覚悟しなさいよ…♥」

はっ
あっ
はっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ
ぱんっ

「ねばるわね…♥
さっさと射精しちゃい
なさいよ♥♥」

「ほら♥
おちんちんが
出した出したいって
言ってるわよ♥♥」

「はしたなく
ピュッピュッ
しちゃいなさいよ……♥♥」

はっ
あっ
はっ
ばんっ
ばんっ
ばんっ
ばんっ

どぴゅっ♥ぴゅっ♥
びゅくっ♥びゅるるっ♥♥♥

「んんっ♥くぅ♥
イっ…イったわね…♥♥♥」

「今日はしっかりザーメン
溜めて来てるんでしょ？
まだまだこれからよ♥」

数時間後。
ぴくっ
はっ♡
はっ♡
あっ♡
ぴくっ
「どう女の子に
喘がされる気分は……
最高でしょ♥」
ぷしゅっ
ぷしゅっ
ぷしゅっ
ぷしゅっ
ズチュ
ズチュ

「ほんとに赤ちゃん作る受精エッチしちゃう？」
「私は全然かまわないけど♥」
ぴくっ
ぴくっ
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
ドピュッ
ズチュ
ズチュ

「ほらもう射精ちゃんでしょ♥」
「一緒にイこ♥……♥」
あっ
はっ
あッ
はっ
パンパンパンパン

ひぎぃ♡
あ♡
ビクッ
ビクッ♡
ビクッ
ビクッ
ビクッ

「うわ…すごい射精てる♥♥
こんなに膣内に射精されたの初めてかも……♥♥」
ゲ
ゲ
どくん…
どくん…
二乃はおもむろに
俺自身を
秘部から引き抜いた。

「5回連続でエッチしちゃったから大分精液溜まってるかも♥」

「やば……♥すごいの出そう♥♥」

ドピュッ♥

「まだ金玉に精液残ってるんでしょ♥わかってるわよ♥♥」

ふっ♥

ぷちゅっ

ぷちゅっ

ふっ♥

「お口便所してあげるんだから全部ザーメンロマンコ出しなさいよ♥♥」

「うっ♥出る♥♥おまんこで♥ザーメン吹きしちゃう♥♥」

ぶしゅ

「ふっ♥ふっ♥」

「イって♥イって♥全部飲ませて♥♥」

「すごいの噴いちゃった♥
本当に孕んじゃうかも…♥♥♥」

ぴくっ

ぴくっ

どくどくっ

「まっ……
私は全然かまわないの
だけど♥」

ビュッ

ビュッ

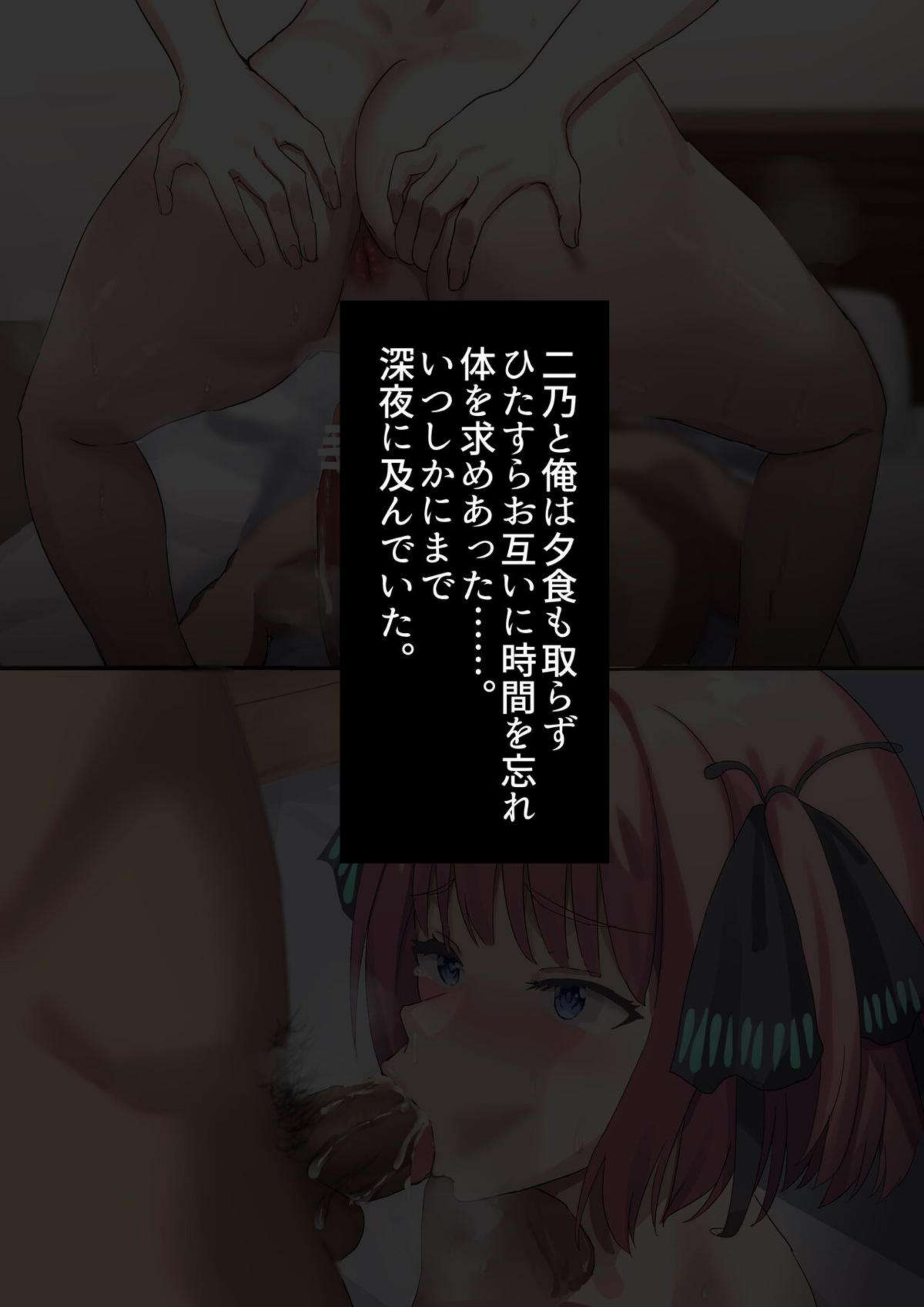
ビュッ

「すごい臭くて濃厚なのがいっぱい♥♥」

んぶぶ

んッッ

「うっ…♥やば…この臭い好き……♥」


二乃と俺は夕食も取らず
ひすらお互いに時間を忘れ
た体求めあった……。
をいしかにまで
つ深に及んでいた。
夜

二乃はやさしく
俺の手をにぎってきた。

「ごめん
寝てた…？」

「そう……
起きてたのね……♥」

二乃は俺の顔を覗きこむと
まじまじと見て微笑んだ。

『……
うぅん……
なんでもないわ……』
『おやすみ……』